

# 地歴公民(世界史) 慶應義塾大学 経済学部 1/2

## <全体分析>

試験時間 80分

### 解答形式

選択式・記述式・論述式

### 分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

近年の傾向を踏襲し、今年度も大問3題の構成。解答数は昨年度の35個に対し今年度は46個であり増加した。論述は一昨年度、昨年度と同じく10問であった。資料・グラフの読み取りや論述の能力が求められる点で、思考力・表現力を求める本学部の傾向通りといえる。

### 出題の特徴

短い論述問題を多く出題する傾向や年代整序問題・資料問題の出題は例年通り。経済学部の特徴である地図問題、グラフ問題、図版問題については、図版問題以外が出題された。なお、2022年度、2020年度は全パターンが出題され、2021年度は地図問題しか出題されなかった。経済学部では、総じて難解な知識が要求されるわけではないものの、資料やデータをもとに知識を応用する能力が求められており、単なる史実の丸暗記では太刀打ちできない。

### その他トピックス

慶應義塾大学経済学部は、以前から思考力・判断力を重視する出題を行ってきた。また、今年度の大問Iでは近代の日本とドイツの関係を扱っているが、2022年度は「17世紀に日本を訪れたケンペル」、2021年度は対馬を題材として日朝関係を問うたように、世界史の中の日本という観点から出題された。なお、大問Iの出題テーマは日本史の問題と同一である。2022年度の高校1年生から歴史総合が導入されたことを踏まえ、世界史・日本史の垣根を越えた歴史学習が強く意識されているといえるだろう。

## <大問分析>

番号	形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	選択式 記述式 論述式	近代の日本とドイツの関係	2023年度の日本史と同一のテーマ。冒頭の問題文も日本史と同一で、下線の箇所と出題内容が異なる。問1(3)ブランツの東方外交と、オーデル=ナイセ線を示す。2022年度の間12に近い出題。問2(1)インド帝国の成立は1877年なので、解答には含めない。問5ワシントン会議の全権代表は、当時海軍大臣であった加藤友三郎。ワシントン会議後、加藤は首相となりシベリア本土からの撤兵を決定した。シベリア出兵に伴う日本史の知識が必要で、世界史選択者には難しい。	標準
II	選択式 記述式 論述式	中国の対外関係(近世～現代)	問6アカプルコ貿易が2021年度、2022年度に出題されているように、16世紀における海域世界は頻出のテーマである。問7(1)(オ)1はカシュガル。イリ地方はカザフスタンに接しており2が解答。(2)ヤークーブ=ベクがコーカンド=ハン国の出身とわからなくても、問題文の最後に「1876年にロシアに併合された」とあることから、保護国化されたヒヴァ=ハン国やブハラ=ハン国を外すことができる。	標準

III	選択式 論述式	経済学者ワシリー・レオンチェフ (近世～現代)	<p>問 14 アメリカ合衆国では 1929 年におけるニューヨークの株価暴落を発端として 1932 年まで工業生産が落ち込む深刻な不況に陥り、ニューディール期に回復をみせるものの、1937 年の後半から工業生産が落ち込み、1938 年には工業の不振が再び顕著となる。また、1935 年にワグナー法が制定され、1938 年に産業別組織会議 (CIO) が成立したことなどを背景に、労働組合加入者数が増加したと推測される。これらのことから、a が工業生産指数で、b が労働組合加入者数だと判断する。また、株価大暴落を受けて関税が大幅に引き上げられたこと、アメリカ合衆国の失業率が 32 年から 33 年にかけて 20% 台半ばにまで上昇したことから判断して、関税率が c、失業率が d と判断する。これらのことから判断して、グラフは 1923 年から 1952 年までの 30 年間で扱ったものと判断できる。問 15 (1) GATT の成立した 1940 年代には、具体的な物品を扱う貿易が想定されており、まだサービス貿易や知的所有権などの問題が顕在化していなかった。これらの指摘も解答として成立するだろう。問 16 (1) (ア) a でミュンヘン会談からイギリス・フランスを想起し、(1) の選択肢にイギリスがないこと、b でスイスにフランス語地域もあることから、フランスと判断する。c はヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』を想起する。問 17 a (a) のビキニ環礁がマーシャル諸島にあると問題文に示されているので、マーシャル諸島がミクロネシアに位置することから判断する。</p>	難
-----	------------	----------------------------	--	---

※難易度は 5 段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

経済学部では、年代整序問題や、出来事の起こった時期を年表中から選ばせる問題が多いため、歴史の流れや事項の前後関係、年号をしっかりと学習したい。経済学部では同じ年に起こった事項でも、その前後関係を判断して史実順に並べさせるような出題をするため、単に年号の数字を覚えるだけの学習では不十分である。また、現代の欧米史は経済学部の頻出テーマであるため、経済学部の性格を考慮した学習が望まれる。類似の資料やグラフがたびたび扱われているため、過去問を解くことは経済学部を受験するにあたって必須といえよう。